
リミツ・ロボツ

刀魚 秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロミツ・ロボツ

【NZコード】

N1077V

【作者名】

刀魚 秋

【あらすじ】

科学が嫌いな科学研究者である私が、論文の為に作り上げたロボット。それは、『私』と私の日常が終焉する、その為のカウントダウン。

私と美奈の共同研究：一日目（前書き）

こんにちは。刀魚 秋と申します。初投稿です。

拙い文章の上、微量ながら特殊ジャンル傾向のお話で申し訳ございません。

貴方様のお暇つぶしにでもなりましたら幸いです。

私と美奈の共同研究：一日目

散々好きだとほざいていた研究。散々やりたいとほざいていた創作。散々大切だとほざいていた工具。実は余り、好きじゃない。

私の両親が研究家の端くれだつたのは偶然。私がその期待を一手に担う一人娘だつたのも偶然。その期待を裏切ることなく、私の論文が世界的に評価されたのも、ほんの偶然。

度重なる偶然によつて生まれた『私』という存在は、必然的に科学が大好きになる というわけではなくて。むしろ、そんなもの大嫌いだった。正直やつてられない。でも、『私』は科学が大好きでなくてはならなかつた。

世間が求めているのは私じゃない、『私』なのだ。

私は名は神木 真奈という がこの世に生を受けたのは、今から丁度二十年と八ヶ月と四日と十時間五十分前の話である。正確かどうかは知らない。兎にも角にも、私という存在があと四ヶ月で人生二十一年目に突入することだけ覚えていて欲しい。

それで、本題となるのは『私』の方だ。彼女は八年と四ヶ月と…兎に角、八年前に生を受けた。私の論文が偶然成功を叩きだした、その年に。

私は、この言い方は好きではないけれど、俗にいう多重人格者だと思つてくれればいい。お互いの存在を認識しあい、取り敢えず会話は成り立つ。実際には少し違うのだと『私』 神木 真奈が講釈してくれたが、私にはさっぱりだつた。

ちなみに言つておくと、美奈という名前は私が贈与した。双子の妹っぽくて良いじゃないと言つたら、お前が妹だ馬鹿と言われてしまった。まったく、辛辣な人格だこと。

美奈には私の考えていることが一発で伝わつてしまつ。そりやあ、同じ体で同じ脳で人格だけ違うから当たり前だ。美奈の方は科学大

好きっ子だから、迂闊に「科学嫌い！」なんて考えちゃった日にはもう、乗っ取られて論文書かされて知らないうちに寝不足で目が痛いし書きすぎで腕が痛いなんてこともある。

「またそうされたいか、この二ートが」

「うるさい。二ートじゃなくて立派な研究者だつての」

また読まれた。ちなみに私に職はないので二ートからの訂正はいらなかつたりする。批評、もとい論文をたつたの一本書くだけでお金が入つてくるんだから、世の中つていうのは不思議だ。そこまでしていい人材が欲しいか。ははは、もつと崇めろ。

今作成中なのはロボットだつたりする。まるで人間のような、精密な作りにするのに時間がかかりすぎた。途中で美奈が手助けしてくれなかつたら今頃爆発しているかもしね。

何だかんだで、私の『世間にに対する人格』である美奈は良き相棒だ。これでも良い奴なんだ、きっと多分メイビー。

「多分とは何だ、多分とは。私は充分良い奴ではないか」

「毎回私の理論構築の邪魔していくくせによく言うよ」

このロボットを作るときにも、随分と邪魔された。夜通しで議論したりもした。自分相手に議論とは、周りが見たら可哀想としか思えない。

このロボットが完成して、人格の稼働が可能になり次第論文を書き上げる。趣旨は、「ロボットは人間になりうるのか」。

勿論物理的な意味じやない。ロボットが人間のような複雑な感情に耐えうるのかの試験的なものだ。これが成功すれば、私の将来も安泰だろう。世界は大変なことになるかもしね。

「また邪魔しないでよ。」

「既に実証された理論を否定するような愚かな真似はせん」

その言葉、覚えときなさいよ、美奈。これで邪魔してきいたら容赦なくぶつ飛ばしてやる。……あ、ぶつ飛ばしたら私がまずいのか。じゃあ追い出してやろうか。いや、それも私がまずくなる。どうしよう。まあ、どうにかしてやる。

絶対これは美奈に読まれているけれど、だから美奈はにやにや笑つているんだろうけれど、私は構うことなく、配線の最終チェックを終えた。

私と美奈の共同研究・一 日田（後書き）

やひかしたとしか書こよつが「」やれこせん。
誤字脱字等「」ぞこましたら、作者へ「」連絡ください。出来る限り
早急に修正いたします。
また、「」意見「」感想等「」ぞこめしたらお気軽に「」連絡くださいま
せ。

私と美奈の共同研究・一日目（前書き）

そんなわけで、一話目です。

更新は不定期になつてしまつますが、どうぞよろしくお願いします。

「よし。出来た」

ロボット自体は完成した。完璧な出来栄えだ、と自分で言つていて虚しくなる。取り敢えず、完成は完成なのだ。そうに決まつてゐる。後、必要になるのは 所謂『実験体』。ロボットに意識と人格を投影してくれる人間だ。言つておくがアテはない。私みたいな二トにそんな良い友達いるか馬鹿野郎。誰が一番馬鹿つて、私が一番馬鹿だ。

こんなことなら、せめて一人くらい良い友達を作つておくんだつた。酷く後悔する。そもそも、私の性格じゃ友人なんか作れやしない。いるのは変な科学オタクと、同じく変な一般人 といふ言い方も変だが、それ以外の表現が見当たらない のみだ。奴らが手伝つてくれないことは確定しているのが悲しいところ。

「仕方あるまいな」

不意に美奈がそう呟いた。美奈は私の口を借りて声を出すから、周囲から見たら私が呟いているようにしか見えないのだろう。だが幸いにも私は部屋から出ない引きこもりさんだ。誰にも見られる心配はない。

何が、と問うと、私が実験台になつてやるつ、と返つてくる。科学が好きすぎてとうとうおかしくなつたかと思い、私は美奈に同情の言葉を送つた。返つてきたのは罵倒の嵐。当然の結果だ。そういうことを予想して言つたんだから。

「私も体が欲しかつたからな。丁度いい」

「あ、そ。道理で今回は聞き分けがいいと思つた」

「どうでも構わん。ほら」

私の体は勝手に前へ。美奈の意志だが、敢えて逆らわない。ロボットに接続されたマシンのスイッチを入れて数秒、脳内が搔き回されるような痛みと引き換えに、美奈は目の前にいた。

「ううだとでも言いだしそうな程得意げに笑いながら、初めて得た自分だけの体を私に見せつけてくる『少女型感情発現ロボット』は、痛みからの突然の解放に頭がぐらぐらしている私に、食らいつかんばかりに質問を投げかけてくる。

「本当に上手くいったぞ！徹夜した甲斐があったな、なあ真奈！どうだ？ちゃんと動いているか？継ぎ目が出たりしていないか？顔はいまいち分からん、確認してくれ！」

「ああ……ちよ、待つて、頭痛い……」

不快感が頭に残る。嗚呼、気持ち悪い。これじゃ実用化は不可能だなあ。といふか、良いな、ロボット。痛覚ないし。でも思い込みで痛いことはあるのかな。そんなことを考えながら、私は素早く『美奈の体』に目を移す。

特に不具合はないようだ。美奈も随分と喜んでいる。相変わらず口が悪いのだけは変わらないが、珍しくはしゃいでいるので不問にしよう。

「ううして。私と美奈は別々の体を持つて、『姉、真奈』と『姉にそっくりな妹、美奈』としての研究生生活を開始した。

私と美奈の共同研究・一〇四（後書き）

何というか、やはり出来は今一な気がします。
楽しんでいただけたなら幸いです。誤字脱字、「意見」「感想等」
ぞいましたら、お気軽に作者までご連絡ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1077v/>

リミツツ・ロボツツ

2011年7月23日03時23分発行